

書寫の理想

誠に残念なことだが、実用としての書の衰退が止まりそうにない。平成二十三年度の世論調査によれば、情報交換手段の多様化故に「手紙など利用しなくなった」や「手で字を書くのが面倒くさく感じるようになった」、結果「漢字を正確に書く力が衰えた」という解答が66・5%なのだという。

先日テレビのクイズ番組を見ていた。その出演者は口頃教養の高さや博識ぶりである有名人達で、成る程次々と難問を解いて行く能力の高さに舌を巻く思いであった。ところがである。設問が文字のことに移り、所謂「字母」を答える問題が出された。例えば平仮名の「め」の元の漢字は？更に「た」の字母は、と自他共に平素物知りと目された人達がヒントも有った上で少し考えてもみれば想像出来そうな問いに対して、何とも的外れな珍解答揃い、見ていてとても笑えず愕然としたものである。

他日、街の本屋で出遇ったこれ又という一件の話。実は私共の方で、近々「大きめの字から一癒しの写経(仮題)」という般若心経のための文字学習用ドリル形式の本を出すべく鋭意取り組んでいるのだが、そこでは歴史的・伝統的に見て過不足の無いようにと当然の事乍ら極力の心構え態勢である。

戦後我国の文字がややもすればその数を制限したり、より簡便な方へとシフトしてきたきらいがあった上に、冒頭の如き今日の世相、有様なので、写経という物が物ゆえに特別な思い入れすらあろうというもの。

さて件の本屋のコーナーには思いの外写経に関する本も多く並んでいて、ちよつとばかり安心の思いでみてみると、何とも理解に苦しむもの発見/その本も当方のものに似て「般若心経」をこちらは硬筆に

て一字ずつ書き写し手習おうという式のもののだが、何とその手本となる文字が明・朝・体・活・字そのままなのである。まさかと見てみると、さる大学教授の手になる至極大真面目なものらしいのだ。

現代いまのような勢いで時代が進むと共に、簡便を求むるのあまりよもや中国のように本来の漢字を捨てて、単純化された「簡体文字」の如きものに成つて了いはせぬか、否々果てはコンピュータ操作には便利に違いないアルファベットに・・・などと若しかの不安に恐れ戦くのは私だけであろうか。だいいち右の文字のことに先行するように日本語が妙な進化？を続けていて、今や「美味しい」を「やばい!」、「腹が立つ」を「むかつく」、「怒る」が「切れる」と言わねばならぬらしいし、また「ハンパない」「チャリンコ」等々と、少しばかり昔の人であつたならとても会話は成立すまいと思われるような現状である。

何も職業柄の話ではないが、正しい言葉遣いを意識したり、手書きによる文字の効用をもつと見直すべきではあるまいか。それらは思いを巡らせたり、筆触、視覚に加えて運動感覚等々、複合的に想像以上の脳活性化につながっているのは間違いないところ。

私達が誇るべき日本の歴史を知り守る上でも、そんな悪しき状況を脱して、世代、時代間での疎通を防いでしまうような愚を避けるべきであろうと切に思う。

私事、「紺屋の白袴」とならぬようその辺りは十分に自重しているつもり。プライベートではパソコン、スマホの類から距離を置いての暮らしを旨とし、現にこの手の原稿も未だに手書きでもって乱暴に書き散らかし、入力して下さる方に毎度大変なご苦労をおかけするという今や流行のワイルド志向/良いのか悪いのか、誠に難しい時代ではある。